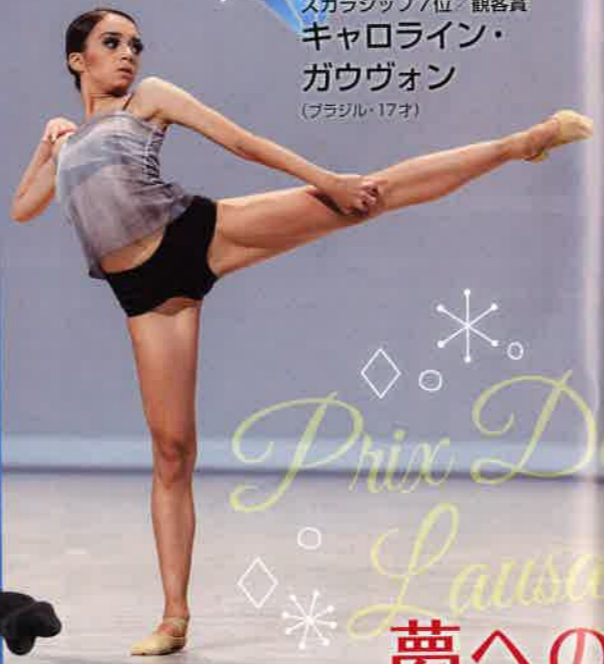


「ドン・キホーテ」(ワシントン)
 スカラシップ1位
 ルドルフ・ヌレエフ財団芸術賞
 シェイル・ワグマン
 (カナダ・17才)



「Chroma」
 スカラシップ7位 観客賞
 キャロライン・ガウヴォン
 (ブラジル・17才)



「ドン・キホーテ」(キュービッド)

スカラシップ3位
 グオ・ウェンジン
 (中国・16才)



「Plan to B」

スカラシップ6位
 ミゲル・アンヘル・ダビド・アラランダ・マイダナ
 (パラグアイ・18才)



Prix De
 Lausanne 2018
 夢への 第一歩!

ローザンヌ国際バレエコンクール

写真 / A:Gregory Batardon
 B:Rodrigo Buas

1月28日~2月4日にスイスで開催された、第46回ローザンヌ国際バレエコンクール。世界38カ国380人の応募者のなかから、ビデオ審査を通過した74名が出場しました! コンクールのようすや、出場者&審査員へのインタビューなどたっぷりご紹介いたします☆

スカラシップ2位 エスポワール賞
 パク・ハンナ
 (韓国・15才)



スカラシップ5位
 チャオ・シンユエ
 (中国・17才)

スカラシップ8位
 アヴィヴァ・ゲルファーマンドゥル
 (アメリカ・16才)



スカラシップ4位
 コンテンポラリー賞
 イ・ジュンス
 (韓国・16才)



ステージ審査

2/2.3

準決選と決選は、ステージ上でクラシックとコンテンポラリーのヴァリエーションを披露します。それまでのレッスンと準決選でのヴァリエーションを総合的に審査し、21名が決選に進みました。決選のあとは結果発表と授賞式が行われ、会場から出場者たちへ、祝福の拍手が送られました。



左: 準決選にさきか
けてステージ上で行
われたクラス・レッ
スン 下: 授賞式の
ようす



男子ジュニアの
コンテンポラリー・
レッスン



女子ジュニアのクラス・レッスン



右: 女子シニアのクラス・
レッスン。指導はステファ
ニー・アルント先生。



コンテンポラリーのヴァリエーション・コーチングを
受ける宮原詩音



レッスン審査では、参加
者の正面に審査員がずら
り。手前には、副審
査員長のニーナ・アナニア
シヴィリ

若きダンサーたち、 挑戦の1週間!

スイス、ボーリュ劇場で行われたクラス・レッスンや
ヴァリエーションのコーチング、
ステージ審査のようすを紹介します!

出場者登録&クラス・レッスン

コンクール初日は、出場者登録とコンクールの説明が行
われます。そのあとは男女にわかれてクラス・レッスン。
審査なしのクラス・レッスンはこれが最初で最後です。



クラス・レッスン&コーチング

今年から参加年齢が引き下げられ、14才6ヵ月から出場
できるようになりました。それにより出場者は、男女
それぞれジュニア(14~16才)とシニア(17~19才)の計
4グループに分かれて審査を受けます。朝9時ごろから
夕方5時ごろまで、クラシックとコンテンポラリー、そ
れぞれのレッスンとヴァリエーション・コーチングが行わ
れました。また、各グループ、クラシックとコンテンポ
ラリーでいちどずつ、ランスルー(通し稽古)の時間も設
けられていました。



第46回 ローザンヌ国際バレエコンクール 審査結果

(2018年1月28日~2月4日/スイス・ボーリュ劇場)

◆スカラシップ賞

シェイル・ワグマン(カナダ・17才)

バク・ハンナ(韓国・15才)

グオ・ウェンジン(中国・16才)

イ・ジュンス(韓国・16才)

チャオ・シンユエ(中国・17才)

ミゲル・アンヘル・ダビド・アラング・マイダナ

(パラグアイ・18才)

キャロライン・ガウヴォン(ブラジル・17才)

アヴィヴァ・ゲルファー=ムンドゥル

(アメリカ・16才)

◆コンテンポラリー賞

イ・ジュンス(韓国・16才)

◆ベスト・スイス賞

ルーカス・バレマン(ベルギー・18才)

◆ルドルフ・ヌレフ財団芸術賞

シェイル・ワグマン(カナダ・17才)

◆観客賞

キャロライン・ガウヴォン(ブラジル・17才)

◆エスポワール賞

バク・ハンナ(韓国・15才)

●日本人決選進出者

大木愛菜、森脇崇行

●審査員

審査員長/テッド・ブランセン

審査員/ニーナ・アナニアシヴィリ、加治屋百

合子、ダヴィッド・カラベティヤン、ビルギット・

カイル、オリヴァー・マツ、リサ・バヴァーン、

クリストファー・ストウェル、デミス・ヴォルビ

*年齢は出場時のもの

Interview

シェリー・パワー

ローザンヌ・コンクール芸術監督

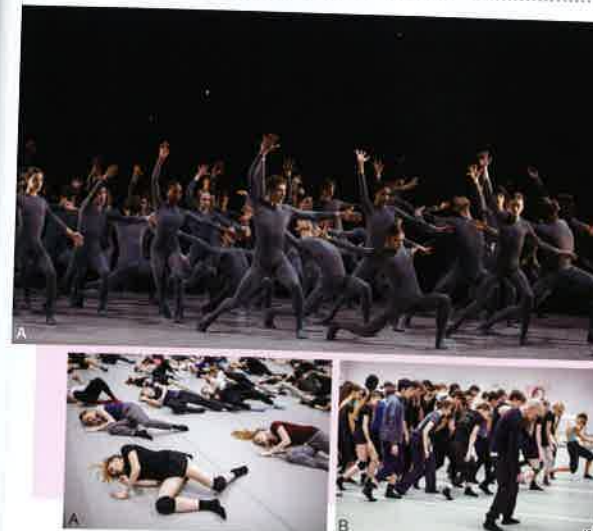


日本人はいわれることをよく
聞き、学びに貪欲で、いう
ことがないほど素晴らしいです。あえていうな
らば、これは日本人に限らないのですが、ヴァ
リエーションの練習だけに集中しすぎるのでは
なく、毎日の基礎練習をもっと大切にしてい
たいということ。ダンスを通して自分がどんな人
間なのかを表現し、世界で唯一のアーティスト
になってください。(インタビュー:岡見さえ)

写真/Melissa Fitzgerald

新プロジェクトが 取り入れられました!! パートナー・スクールズ コレオグラフィック・プロジェクト

今年から、振付家とのコラボレーション企画 (Partner
Schools Choreographic Project) が新たに導入されまし
た。ローザンヌ・コンクールと提携する学校から選出された
生徒たちが、振付家とひとつの作品を作りあげていきます。
第1回目の振付家に選ばれたのは、1994年にローザンヌ賞
を受賞し、現在はデュルンベルグ・バレエの芸術監督を務
めるゴヨ・モンテロ。今回選ばれた51人の生徒たちは、8
日間にわたって『Pulse』(モンテロがこの企画のために用意
した新作)の練習を行い、決選の日に舞台上で発表しました。



右下: 振りうつしのようす。モンテロ本人がこまかいニュアンスまで伝えます。



かじや・ゆりこ
愛知県生まれ。2000年ローザンヌ
国際バレエコンクールでスカラシップ
受賞。アメリカのヒューストン・
バレエ プリンシパル。

加治屋百合子 「踊る心」を大切に

「まずは今回の全体的な感想を。ほんとうに才能あふれるダンサーばかりでした！ 1週間というみじかい期間で、みなそれぞれの成長を見せてくれて、審査員としてとてもうれしいですし、ダンサーとしてもパワーと刺激をもらいました。」

「審査で重視したポイントは？
基礎や適応力、将来性はもちろんですが、とくに重視したのは「踊る心」をもっているかどうかです。とくに最近の若い子たちは、踊る要素を忘れて、ただだけ回れるか、どれだけ脚を高く上げられるか、ということばかりにとらわれてしまっているように感じます。音楽と一体化し、体全体を使って気持ちを表現することは、プロになるためにはとても重要な要素です。」

「印象に残った出場者は？
今回とくに感じたのが、自分の空間をもっている子はとても目を

引くということなんです。今年1位を受賞した男の子は、そういう意味でも印象に残っています。舞台に出た瞬間から、自分の空間を作りあげ、それを見ている人とシェアしていました。テクニクだけでお客さんをわかせるのではなく、かれのように自分の空間をまわりと共有する意識は、つねにみなさんにももってほしいと思います。」

「日本人参加者については？
今回、受賞者はいませんでした。が、みんなほんとうにすばらしかったです。とくにファイナルに出場したふたりは、クラス・レッスンのときから審査員も注目していました。」

「それはなぜでしょうか？
大木さんは自分のもつ条件を最大限に生かした踊りで、テクニクも正確でいいねでした。やはり自分の体や見せ方をわかっているということ、ダンサーにとつて不可欠なことですし、それが18才という若さでできているということに将来性を感じましたね。森脇くんは表現ゆたかで、ジュニアの出場者のなかでも一際目立ってその若々しさを発信していました。それにすごく音感がいい。先生のいうことをすぐに感じとる勘のよさや、全身のコーディネーション



クラスの審査中、生徒を見つめる加治屋さん



授賞式のあとの記念撮影

右：ファイナルで「ライモンダ」を踊る大木愛菜さん
下：コンテンポラリーのレッスンを受ける森脇くん



森脇 崇行 (15才)

小池バレエスタジオ
全力を尽くして

「ほくは基礎がまだまだなので、まさか自分がビデオ審査を通して、ファイナルにまで出場できるなんて思いもよみませんでした。本番は、賞をめざすというより、多くの方に踊りを見てもらえるこのチャンスをむだにしないよう、しっかりとアピールして、たくさんの方の目を惹きつけたい」という気持ちで臨みました。」

「苦戦したのは、体力面。クラシックもコンテンポラリーも終盤になるにつれてテンポが速くなってくるんです。とくにコンテンポラリーのほうは、「息切

れ」というタイトルのとおりとてもハードなので、少しセーブして踊りがちで……。しかし先生から「力をセーブせず、つねに全力で踊ることが大切なんだよ」とアドバイスをいただき、何度もつけて練習したり、レッスンの時間を大幅に増やしたりして体力向上に努めました。本番は全力で気持ちよく踊ることができました！」

「いまの課題は基礎の強化。ローザンヌでも、センターよりバーでの注意が多かったので、さらについていねいなレッスンを心がけたいと思います。」



Takayuki Moriwaki

「コッペリア」(フランス)

大木 愛菜 (18才)

小池バレエスタジオ/ジョン・クランコ・スクール(ドイツ)

アドバイスを生かして

「ローザンヌでの1週間は、とにかくまわりの空気がなごやかで、あまりストレスや緊張を感じずに過ごせました。とくにシニアの女子は14名と少なく、ライバルというよりも仲間のような感覚。ただ、シニアとなるとみんなその場で与えられた振付をビックアップするのがとても速くて……。私自身すごくきたえられたと思います。」

「踊りのなかでいちばん意識したのは、ボール・ド・ブラ。私はもともと腕の動きが硬くなりがちなので、よけいな力をぬいて、どこからどこに腕を動かすのか、

しっかり意識するようにしました。ライモンダではモニク・ルランヴェルセのあの腕の位置を1回ごとに少しずつ上げていくような振付を変えたいんです。なめらかに動かすことだけでなく、動く大きさや質を変えることで、物語の流れも表現できたと思います。」

「終了後、アメリカのタルサ・バレエからオファーをいただきました！ 入団に向けて、さらにプロとしての体作りと自分だけの踊りを深めていきたいと思っています。」



Aoi Okita

「Touch, Feel, Sense」